

瑞医

世界に羽ばたくMEDIPORT
2023.10.VOL.51

contents

極 社会貢献
Social contribution

人 時の人
People in the news

技 研究&教育
Current topics in research and education

和 お知らせ
Information

THEインパクトランキング2023の SDG3(健康と福祉部門)で世界7位!

2023年6月、イギリスの高等教育専門誌「Times Higher Education (THE)」がTHEインパクトランキング2023を発表しました。2019年から始まったこのランキングは、国連が掲げる「持続可能な開発目標 Sustainable Development Goals (SDGs)」に対して、大学がいかに取り組み、社会に影響を与えているかを可視化したランキングです。5回目となる今回は、115の国・地域から過去最多となる1,705校が参加しました。その中で国内の大学の参加校は91校でした。

このTHEインパクトランキング2023において、本学は総合ランキングで世界201-300位(国内同率9位)にランクインしました。また、SDG別のランキングでは、SDG3「すべての人に健康と福祉を」において、過去最高となる世界7位(2年連続国内1位)となりました。特に、「健康と福祉」の分野における本学の研究及び地域連携などの取り組みが、世界7位という高い評価につながりました。

今後も本学では、世界をリードする大学を目指し、国際社会共通の課題に積極的に取り組んでまいります。

文責:企画推進課

SDG3ランキングで世界トップ100にランクインした大学一覧

世界順位	国内順位	大学名	SDG3スコア
7	1	名古屋市立大学	88.9
16	2	滋賀医科大学	87.4
26	3	藤田医科大学	86.4
47	4	獨協医科大学	84.2
73	5	徳島大学	81.2
88	6	秋田大学	79.9
92	7	関西医科大学	79.6



“瑞医の由来”

「瑞医(ずいい)」という言葉は、瑞穂で育った医師が心の支えとなる名市大、「瑞」にはめでたいことという意味があるので新しい門出の広報誌にと考えました。新しく発足した同窓会と一体となって歩むことを目的に、その名前「瑞友会」と相呼応しています。サブタイトルの「MEDIPORT」は、「Medical」と「Port(港・空港)」をかけた造語。名市大を最新情報を発信する拠点とし、卒業生が社会・世界へ出発し、またいつでも戻ってこられる港であるようにとの願いをこめています。

こころの発達医学寄附講座設置 ～名古屋市と名市大で協定締結～

2023年6月1日(木)、名古屋市と「こころの発達医学寄附講座」の設置に関する協定を締結しました。

協定締結式には、名古屋市から河村たかし 市長、佐藤誠司 子ども青少年局長、平松修 健康福祉局長、坪田知広 教育長、本学から郡健二郎 理事長、浅井清文 副理事長・学長、鈴木峰生 副理事長・事務局長、山田敦朗 寄附講座教授が参加し、それぞれの代表者が協定書に署名しました。

河村市長の挨拶に続き、郡理事長の挨拶があり、「これまでも発達障害に関する治療、研究の拠点を作りたいと思っていたが実現に至らなかった。今回実現していただいた名古屋市に感謝したい。」と述べられました。

この寄附講座は、発達障害に関する先進的な調査研究をさらに推進し、発達障害児者へのライフステージを通じた切れ目のない支援に寄与することを目的としています。調査研究の内容としては、発達障害に関する医学的な調査研究、現場で活用できるアセスメントツールの開発などが想定されています。

今回、寄附講座の開設にあわせて市立大学病院に「こころの発達診療研究センター」を設置することにより、発達障害に関する研究・臨床拠点として、高度な医療の提供、医学的な調査研究等を行うとともに、名古屋市と連携を図りながら発達障害児者への支援に関する事業を積極的に行ってまいります。

文責：医学研究推進課



副腎腫瘍センター開設のお知らせ

このたび名市大病院では、“かくれたコモディーズ”、副腎腫瘍の診断と治療に取り組む目的で、副腎腫瘍センターを設立しました。同センターでは、泌尿器科、放射線診断・IVR科、内分泌・糖尿病内科を中心に、循環器内科、腎臓内科、麻酔科、病理診断部、看護部、管理課、医事課などが部門横断的に力を合わせて取り組むことで副腎腫瘍の正確かつタイムリーな診断と、最先端の治療を提供いたします。

副腎腫瘍はCT検査や腹部エコー検査などの画像検査で偶発的に見つかることも多い腫瘍です。また、高血圧、糖尿病、肥満症、電解質異常などのあり

ふれた病気や病態の背後に潜んでいることもあり、このような場合、腫瘍サイズは必ずしも大きくはないこともあります。このようなケースでは診断が先送りとなり、治療の要否について結論が出ないままに時間が経ってしまうこともあります。

副腎腫瘍は診断確定や治療方針の決定に専門的な判断が必要な疾患です。画像検査で直径3cm以上の腫瘍が見つかった場合はもちろんのこと、新規発症の高血圧や難治性の高血圧、肥満を伴う治療困難な糖尿病、低カリウム血症の持続などでは是非お気軽に当センター（窓口は、内分泌・糖尿病内科、循環器内科、腎臓内科）にご依頼ください。

文責：名市大病院 副腎腫瘍センター



新任教授紹介

総合診療医学・総合内科学 宮崎 景 教授

2023年8月1日付で総合診療医学・総合内科学分野教授を拝命いたしました宮崎景です。

私は1997年に名古屋大学医学部を卒業し、循環器内科で研鑽を積み、母校での総合診療科新設を機に転向いたしました。日本の総合診療は黎明期であったため、2008年から米国ミシガン大学家庭医療科でレジデント及び指導医養成フェローとして研鑽を積みました。帰国後は三重大学家庭医療学・地域医療学講座の関連クリニックで家庭医としての診療、専攻医プログラムの運営、研修医、医学生の教育とプライマリ・ケア研究に携わり、2020年から三重大学、2022年から名古屋大学で奉職いたしました。名古屋市立大学では大学病院群における外来、病棟、救急で活躍する病院総合医/総合内科医、近隣クリニックで外来、在宅診療を展開する家庭医を養成し、大学内外、名古屋地域の皆さんの健康、幸せに貢献しながら、プライマリ・ケア研究の拠点づくりにも力を入れて参ります。皆様のご指導のほどよろしくお願いいたします。



宮崎 景 教授

新任教授紹介

東部医療センター 血液・腫瘍内科 柳田 正光 教授

2023年7月1日付けで、名古屋市立大学医学部附属東部医療センター血液・腫瘍内科教授を拝命しました柳田正光(やなだまさみつ)と申します。

私は1995年に名古屋大学医学部を卒業後、名古屋大学医学部血液内科、テキサス大学M.D. アンダーソンがんセンター白血病部門、藤田医科大学血液内科、愛知県がんセンター血液・細胞療法部等で勤務してまいりました。臨床面においては、総合内科専門医、血液専門医、造血細胞移植認定医として患者診療に熱意をもって従事し、研究面においては、白血病を対象とした臨床研究を精力的に行なってきました。

この度は、東部医療センターにおける血液診療、がん診療の拡充を進めるべく、責任ある役目をおおせつかることになり大変の引き締まる思いです。私のこれまでの経験や実績を最大限に発揮して、東部医療センター並びに名古屋市立大学の発展のために尽力していく所存です。どうぞよろしくお願い申し上げます。



柳田 正光 教授

新任教授紹介

東部医療センター 循環器内科 和田 靖明 教授

2023年8月1日付で東部医療センター循環器内科教授を拝命いたしました、和田靖明と申します。謹んでご挨拶申し上げます。

1997年に鳥取大学を卒業後、山口大学第二内科(現在の器官病態内科学)に入局して臨床医としてのキャリアをスタートいたしました。2003年に山口大学大学院を修了した後は、島根県立中央病院、山口大学医学部附属病院で臨床・研究・教育の三位一体のアプローチで、より質の高い医療提供を目指す中で、幅広い循環器疾患に関する知識と経験を蓄積する機会を得ました。これらの経験を通じて、地域医療への貢献と教育の重要性を深く理解し、地域のニーズに応える医療の提供は患者さんとの信頼関係を築く上で欠かせない要素であると感じています。今後は、東部医療センターにおいて、安全かつ高度な医療の提供と優れた医療人の育成に意欲を持って努めてまいります。つきましては、皆様方のご指導ご鞭撻を賜りますよう何卒宜しくお願い申し上げます。



和田 靖明 教授

02 時の人

People in the news

新任教授紹介

医薬学総合研究院 野蔭 一平 教授

2023年5月1日付で新学科設置準備室の教授を拝命致しました野蔭一平と申します。謹んでご挨拶申し上げます。

私は、名古屋大学、信州大学において、リハビリテーション専門職の一つである理学療法士の教育および研究に従事して参りました。また学位取得後には、アメリカ国立衛生研究所に留学する機会を頂き、リハビリテーションの基盤となる運動の学習機構に関する研究を行い、その後もヒトを対象とした研究を継続しております。

本邦における少子高齢化は今後益々進んでいき、名古屋市も例外ではありません。リハビリテーションにはRe(再び)habilis(ふさわしい)という意味があり、病気や障害を持った方がその人らしく生活できるような支援を行っていきます。医学部に設置される新学科では、地域医療に貢献できる質の高い理学療法士を育成するとともに、臨床に還元できる研究を積極的に発信していきたいと考えています。ご指導ご鞭撻を賜りますようお願い致します。

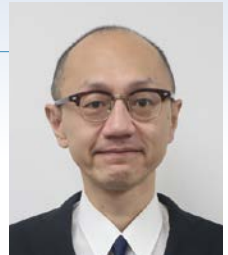


野蔭 一平 教授

新任教授紹介

医薬学総合研究院 佐藤 大介 教授

2023年5月1日付で新学科教授を拝命致しました佐藤大介と申します。謹んでご挨拶申し上げます。セラピスト養成校で教育を担うとともに、横浜市立大学附属病院、千葉大学医学部附属病院で臨床・研究に従事致しました。千葉大学では、地域医療の多様化するニーズに応えるため、職種を横断した体系化した教育プログラムを実践するメンタルプロフェッショナルの育成に携わりました。先進的なリハビリテーションを実践する作業療法士を育成するため、附属病院群と連携し、地域医療への貢献、健康寿命延伸に寄与する教育・研究に尽力して参ります。皆様方のご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。



佐藤 大介 教授

新任教授紹介

こころの発達医学寄附講座 山田 敦朗 教授

2023年8月1日より、こころの発達診療研究センターが開設しました。また同時にこころの発達医学講座という寄附講座も設置されました。センター長および主任教授として務めさせて頂く山田敦朗と申します。我々が取り組むのは神経発達症を抱える方々に対する医療と支援です。神経発達症は子どもだけでなく大人になっても問題が持続するため、ライフスパン全体を通した支援が必要です。支援は医療にとどまらず、子育て、教育、就労といった日常生活全般に深く関わってきます。名古屋市の子ども青少年局、健康福祉局、教育委員会の3局と共同して神経発達症の方々を支えていく体制を作っていくことが使命です。どうぞよろしくお願い申し上げます。



山田 敦朗 教授

新任教授紹介

こころの発達医学寄附講座 永井 幸代 教授

2023年8月1日付けでこころの発達医学寄附講座教授およびこころの発達臨床研究センター 副センター長を拝命致しました永井幸代(ながいゆきよ)でございます。謹んでご挨拶申し上げます。

1989年に名古屋市立大学医学部を卒業し、同大学病院小児科で研修後1992年より日本赤十字社愛知医療センター名古屋第二病院に赴任し、小児科医療全般の研修後25年ほど小児精神科医として勤務してまいりました。子育てのため非常勤と常勤を行き来する選択を受け入れてくださった周囲の皆様のお陰で、働き続けることができ、自閉スペクトラム症の自尊感情、早産児の自閉スペクトラム症などの臨床研究を行ってまいりました。

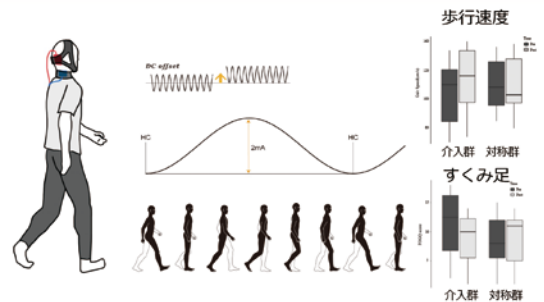
この講座(センター)では、新生児から大人までの発達障害に関わる診療、研究、人材育成に携わり、患者様やご家族はもちろんのこと、若手医師や心理士にも魅力あるセンターとなるよう尽力したいと考えております。大学勤務の機会をいただき、母校に恩返しできればと思っております。皆様方のご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。



永井 幸代 教授

日本発、歩行リハビリテーションの未来への一歩 パーキンソン病に新たな光明

パーキンソン病は運動機能低下を特徴とする神経変性疾患で、体の動きの減少や硬直、振戦、姿勢不安定性、歩行障害など多様な症状が出現します。本研究では、特に有効な介入手段が不足していたパーキンソン病患者の歩行障害に対し、脳への微弱な電気刺激を対象者の歩行に合わせて実施する方法を開発し、効果を検証しました(図)。介入は週2回の歩行リハビリテーションを5週間実施し(計10回)、歩行速度や歩行の左右非対称性の改善を示しました。また、パーキンソン病患者の特徴的な症状であるすくみ足の改善も見られました。本研究で使用した脳刺激方法は、非侵襲・非薬物的な安全性の高い介入であり、今後適応疾患を広げ効果検証を進めていきたいと考えています。

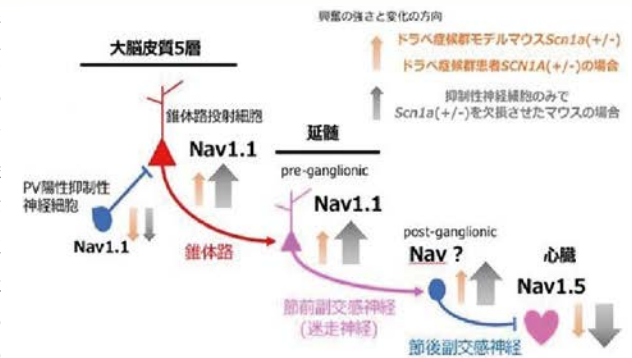


【図の説明】対象者の歩行リズムに合わせて小脳に経頭蓋電気刺激 (TES) を4分間実施した(2回/週を5週間)。結果、歩行速度の増大、すくみ足の改善などを認めた。

文責：リハビリテーション医学 植木 美乃 教授、野嵜 一平 教授

難治てんかん原因タンパクレポーターマウスは突然死発症神経回路を提示する

脳神経科学研究所神経発達症遺伝学分野の山川和弘教授、山形哲司特任助教らは、てんかんで最も多く変異が見られ、また最も高頻度に突然死を伴う難治てんかんであるドラベ症候群の原因遺伝子としても知られるSCN1Aが作るタンパク(ナトリウムチャンネルアルファサブユニット1型:Nav1.1)の脳内発現部位を、Nav1.1の発現部位に人工的に緑色蛍光タンパク(GFP)が発現するようにした遺伝子組換えマウスを作製して詳細に解析しました。その結果、大脳皮質ではNav1.1が抑制性神経細胞の多くを占めるPV陽性細胞で強く発現し、加えて興奮性神経細胞の一つであり骨格筋や心臓などにつながる錐体路投射細胞でも発現が見られることなどを発見しました。今回の発見は、「大脳皮質のPV陽性抑制性神経細胞でのNav1.1の半減が当該細胞の機能低下をもたらし、下流の大脳皮質錐体路投射細胞の脱抑制による過剰興奮、更にはその下流の迷走神経の過剰興奮をもたらし、心臓の過剰抑制から心停止を経て突然死につながる」という突然死の発症神経回路(図)を提示することとなりました。これらの結果は、難治てんかんでの突然死神経回路の解明や治療法の開発につながるものと期待されます。研究成果はeLife誌に掲載されました(PMID: 37219072)。



文責：神経発達症遺伝学 山川 和弘 教授

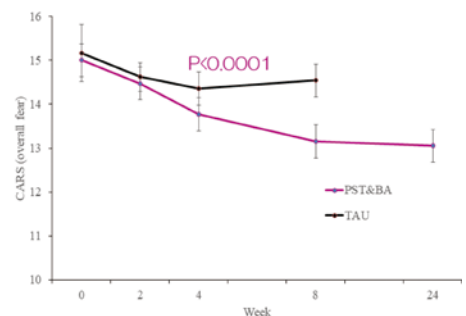
乳がん患者さんの再発に対する恐怖をスマートフォンアプリを用いて軽減することに世界ではじめて成功

乳がんは一般的に予後は良好ですが、再発すると完治が難しく、多くの乳がんの患者さんが再発に対する不安感や恐怖感を経験しており、本症状は日常生活の質を悪化させることもあり、6割を超える乳がん患者さんが再発に対する恐怖を軽減する治療を希望していることがわかっています。

再発に対する恐怖を軽減する治療は、薬剤では有効なものがなく、認知行動療法が期待されていましたが、専門的な治療を提供できる精神科医など医療者の人員不足の問題もあり、ほとんどの患者さんが適切な治療を受けることなく、我慢せざるを得ない状況でした。

以上のような背景のもと、私ども精神・認知・行動医学分野は、乳がん患者さんの再発に対する恐怖をスマートフォンアプリを用いた認知行動療法で軽減することに世界ではじめて成功しました。また本研究は、患者さんが通院しなくても遠隔的に臨床研究に参加できる分散型臨床試験という新しい臨床研究の基盤で開発した点にも特徴があります。研究成果はJournal of Clinical Oncology誌に掲載されました(PMID: 36322882)。

有効性-再発恐怖 (主要評価)

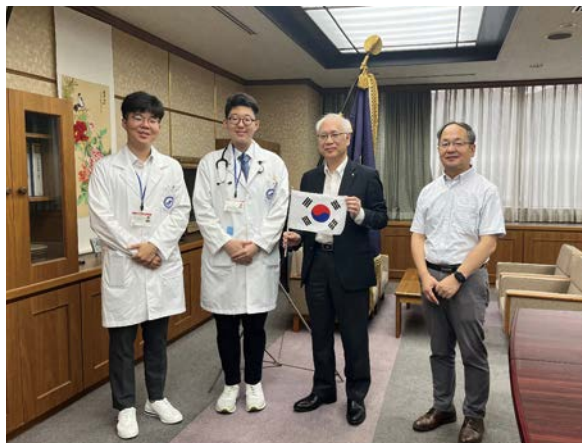


文責：精神・認知・行動医学 明智 龍男 教授

4年ぶりにハルリム大学の留学生を受け入れました

医学部では例年、国際交流協定に基づく学生交流の一環として、協定校である韓国ハルリム大学より留学生を受け入れています。近年、新型コロナウイルス感染拡大の影響により、留学生の受け入れを一時中断していましたが、4年ぶりに再開し、今年は学生2名を受け入れました。

初日に高橋医学部長と神経生化学 鄭准教授より激励のお言葉を賜り、実習を開始しました。2023年7月10日(月)～8月4日(金)の4週間にかけて、ユさんは脳神経外科、整形外科、形成外科、チェさんは脳神経内科、消化器内科の臨床実習に、本学の5,6年生とともに参加しました。初めは緊張していた様子でしたが、5,6年生のサポートもあり、充実した日々を送っていたようです。また、意欲的な留学生と過ごす時間は本学の学生にとっても有意義であったと思います。学生交流のため、留学生を受け入れてくださいました診療科の先生方をはじめ、各分野の皆様にはこの場をお借りして感謝申し上げます。
文責：医療人育成課 医学教育係



右から、鄭准教授、高橋医学研究科長、ユ・ジェヨンさん、チェ・ジョンヒさん

研究力養成コースが始動

2021年度入学者選抜から学校推薦型選抜の定員が30名に拡大し、その入学者は卒業後6年以内には名古屋市立大学に関連に所属することが義務化。早い段階から研究力を育成し、将来のリーダーとして活躍することが期待されています。

新型コロナウイルス感染症の騒動も落ち着き、低学年から研究力を養成するための企画を、7月13日(木)医学研究棟11階講義室Aでスタートさせました。

昨年の基礎自主研修発表会で優秀賞を受賞したM4学生に協力を依頼し、その発表内容を分かりやすく再現、発表後に質疑応答を行うという形式です。今回は神経毒性学配属の荻原 琳くんの発表でした。M1～M3参加者から良い質問が数多く出ました。本年度中に残り3演題の実施を予定しています。
文責：脳神経生理学 飛田 秀樹 教授

令和5年度 夏のオープンキャンパス

新型コロナウイルス感染症が5類感染症に移行されてから初めての「夏のオープンキャンパス」が2023年8月5日(土)に名古屋市立大学桜山キャンパスで開催されました。最高気温が35度を超える猛暑日でしたが、午前と午後の部を合わせて約1000人の方に参加いただきました。会場内は満席でかなり熱気を帯びていましたが、参加者の方々は医学部の紹介、入試の説明、医学部生の話、模擬講義など最後まで熱心に耳を傾けていました。オープンキャンパス終了後も個別の相談ブースには長い列ができ、本学への関心の高さを実感いたしました。今後もオープンキャンパスの内容を充実させ、名古屋市立大学医学部の良さを1人でも多くの受験生の方に伝えることができればと考えています。

文責：副医学部長(入試担当) 加藤 洋一



総務大臣、総務大臣政務官が本学を訪問しました/名市大病院

2023年6月29日(木)、松本剛明総務大臣が中川貴元総務大臣政務官とともに名古屋市立大学を訪問し、市立大学病院を視察しました。名古屋市から中田英雄副市長、杉浦弘昌総務局長が、本学からは郡健二郎理事長はじめ役員が同席し、現在建設中の「救急災害医療センター」について、建設費高騰を踏まえた財政措置の要望書を総務大臣へ手交しました。

その後、間瀬光人病院長から救急災害医療センターや附属病院群、高度医療機器についての説明、今泉祐治理事から産学官共創イノベーションセンターについての説明が行われ、高度医療機器の説明の中で大臣が実際に手術支援ロボット「hinotori™」の操作を体験する時間も設けられました。

説明の後には意見交換が交わされ、最後に、病院のバルコニーから「救急災害医療センター」の建設現場等を視察しました。

文責：名市大病院 経営課



ロボットスーツHAL®によるリハビリテーションを行っています/東部医療センター

当院ではロボットスーツHAL®を2018年7月より導入し、神経難病に対する先進リハビリテーションを行っています。HAL®は身体機能の向上を促す装着型のロボットで、当院では下肢タイプを導入しております。人が筋肉を動かそうとすると、脳から脊髄、運動ニューロンを介して筋肉に神経信号が伝わります。皮膚から漏れ出たこの信号(生体電位信号)を皮膚表面に貼付したセンサーが読み取り、HAL®のパワーユニットを制御してロボットの足を動かします。アシストによって「歩けた」という感覚は脳にフィードバックされ、機能改善への一歩となります。これを繰り返すことで、過剰な負担なく、歩行機能の改善・再生が促進されます。患者さんの下肢を動かそうとする意思に沿ってアシストするため、HAL®を外した状態の歩行も改善し、日常生活の活動度を高めることが期待できます。更にHAL®と連動したトレッドミルが導入されており、より安全かつ効率の良い訓練が行える様、体制を構築しております。

文責：東部医療センター リハビリテーション科・摂食嚥下センター長 青山 公紀



「まったなしの生殖医療～生殖医療センター始動～」/西部医療センター

令和4年の出産数は77万700人といよいよ80万を下回るまで下がり続けております。2022年4月から今まで自費でしか行われなかった生殖医療に健康保険の適応が一部認められるようになりました。つまり生殖医療は特殊な医療ではなく、医療サイドが行わなければならない医療になりました。そこで西部医療センターではいよいよ生殖医療センターが2023年9月から開設されます。

今まで男性不妊症と不育症といった、なかなか専門で受けることのできなかった分野がこの西部医療センターにはありました。そこに体外受精、顕微授精といった女性不妊を専門に行う分野が導入され、完全な生殖医療センターが完成されます。

これにより挙児を希望するすべてのカップルに対しての光になれるようにスタッフ一同一丸となって取り組んでまいります。

文責：西部医療センター 生殖医療センター長 梅本 幸裕



